

考古班による研究の進捗状況

長井謙治・北野博司

1 考古班による研究の目的と方針

本事業は縄文時代以降の東北地方における集落の生成から解体に至る過程と消長要因を解明することを課題として、東北の過去一万年にわたる集落変遷を動的に解明することを目的としている。考古班では、古環境変遷史に係る豊富なデータの蓄積があり、かつ先史時代から現代まで質量ともに豊富な歴史記録を保有する八戸市一帯を研究の核フィールドとして、総合的な研究を実現させている。具体的には、既存の発掘調査事例を集約させた研究基盤を構築して、過去一万年間の八戸市を舞台とした集落変遷と立地の変化にあらわれた歴史動態を明らかにすることを目的とする。さらには、河川流域を単位とした遺跡群の比較研究を通して、複合領域的に復元される日本列島内の「東北」という地域の歴史の一部を明らかにしようと考えている。

山形県高島町日向洞窟遺跡の考古学的調査は洞窟を基点としてどのような居住域を展開したのか、縄文時代草創期における洞窟利用の形態を明らかにして、集落形成プロセスの解明に迫ろうとするものである。ここでの研究課題は、東北日本という範囲を越えて、広く列島全域におよぶ、優れて現代考古学的な問題にもかかわっている。

本構想は基本的には前年度のものを継続している。

2 今年度の研究内容の概略

平成26年度に続いて長井が考古班の総括を担当した。本年度は研究の具体的内容について深化をはかった。前年度に続き、研究内容を「先史班」と「古代班」に二分して研究を進めた。「先史班」を安斎、福田、佐藤、小林圭、村木、横山、市川、根岸、小林克、菅野、菅原、長井、「古代班」を北野、宇部が担当した。近藤はGIS運用における基盤的資料の作成、及びアドバイザーとなった。なお、先史班は原則として縄文時代を対象とした。

基礎研究を継続させると同時に、平成25年度に新設した「流域比較研究ユニット：米代川・岩木川・最上川・北上川流域の縄文集落の比較」の具体的な研究を開始した。八戸市における集落の歴史動態研究においては、前年度の続きとして研究データベースの質的向上を目指した。とりわけ作業を進める上で浮上した問題点を浮き彫りにした。

「流域比較研究ユニット」の具体的研究として、小又川上流域における遺跡巡検と遺物見学を目的とした野外調査を行った（10月4日）。メンバーは安斎、根岸、小林克、菅野、小林圭、菅原、長井である。

本プロジェクト考古班における次年度最終報告を見据えた意見交換を図る目的において、12月13日に第3回考古班研究集会「最終報告書に向けての構想発表」（会場：是川縄文館会議室9：00～）、第3回公開研究会「八戸の集落1万年：古代地域社会の動態—なゼムラができ、消えたか？ Vol.3—」（会場：是川縄文館13：00～）を開催した。第1部の第3回考古班研究集会では、次年度刊行予定の最終報告書の執筆を担当する者を対象とした10から15分程度のハンドアウト資料を使った構想発表を行った。演者は以下の通り。1. 全体（長井謙治・近藤康久）、2. 縄文時代早期（中村哲也）、3. 縄文時代後・晩期（村木淳）、4. 弥生時代（杉山陽亮）5. 古代（宇部則保・北野博司）。今後の課題として、縄文時代中期の項目を作ることが決定した。その執筆には横山（八戸市教育員会）があたることで合意した。

第2部・第3回公開研究会の内容については後述する(2)古代社会研究、(2)東北古代集落変遷に関わる考

古学的・環境史的研究を参照されたい。

流域比較研究ユニットにおいては、北秋田市教育委員会会議室を会場として第2回流域班研究会を開催した（10月4日）。参加者は安斎、小林圭、根岸、小林克、菅野、菅原、長井の計7名である。

各部門における研究方針は、以下の通りである。

(1) 先史班

研究項目を、①八戸市周辺の遺跡データベース（以下、遺跡DB）に基づく共同研究、②東北縄文集落変遷に関わる比較考古学的・環境史研究、の二つにしほりそれぞれ具体的な調査と研究を行う。①では遺跡立地と集落の変遷をテーマとし平成26年度以降本格的に実施した八戸市周辺の旧石器・縄文時代遺跡DBの活用を図る。基本的には平成25年度の方針を継続した。ア）共同研究者が利用可能な図データ集の作成、イ）八戸市教育委員会に保管される遺跡管理データの精度化を行った。ア）に関しては、継続して紙媒体の報告書をデジタルデータに変換（PDF化）して、共同研究者が共有可能な基礎データの作成を目指した。イ）に関しては八戸市埋蔵文化財センターが保管する遺跡台帳の更新を行った。

なお、平成26年度までに登録した世界測地系にいくつかの誤入力があることが判明したため、平成27年12月11日までにそれら全てを訂正し、更新した。立地、密度、流域解析についての予備的分析を開始しており、次年度は遺跡集成データと特定地域を対象とした考古学的個別研究の統合を目指す。

(2) 古代班

研究項目を、①八戸市周辺の遺跡のデータベースに基づく基盤研究、②東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究の二つとし、それぞれ具体的な調査と研究を行った。①では昨年度までに集成したデータベースの補足（遺跡の追加）と、当該データに基づくGIS分析・密度図等の作成（近藤）、データの補正を行った。対象時期を5世紀後半～11世紀代とし、その間を大別5期、細別13期に区分して各時期の竪穴建物数、増減、分布等を検討した。

②では、①の作業と並行して、それぞれの画期の解釈について討論し（7月4日）、これをテーマとした公開研究会「八戸の集落1万年 古代地域社会の動態－なぜムラができ、消えたか－」を12月13日に八戸市で開催した。これとは別に段丘面区分に基づく遺跡立地の詳細を確認するために八戸市域、おいらせ町内の現地踏査を行った（7月5日）。

3 研究の経過報告と今後の計画予定

(1) 縄文社会研究

① 八戸市周辺の遺跡DBに基づく応用研究

プロジェクトの最終年度ということもあり、これまで集成した八戸市周辺地域における縄文集落の遺跡データベースの活用と考古学的研究を進める。具体的には、縄文時代を通して密度の強い地域として把握できた①島守周辺（青森県教育委員会遺跡台帳調べで93遺跡）と②是川・田面木周辺の詳細な考古学的研究を重視する。

先史班では、生態ニッチモデル（Maxent 最大エントロピー法）による八戸市域縄文早・後期遺跡の立地傾向分析を行った。結果、縄文早期集落は比較的標高の低いところに集中し、後期集落は低いところに加えて高いところに第二のピークをもつことがわかった。今後は説明変数を増やす（地質図、植生図、河川からの距離などを組み込む）ことを課題としてこの研究を進める。また、密度分析によって明らかとなった1）縄文時代早期における遺跡数の急増、2）縄文時代早期後半から前期初頭にかけての海進以降後の海岸部での集落構造、3）縄文時代後期にみる遺跡の構造的分布と急増に焦点を当てた考古学的研究を完成させる。

とりわけ、縄文時代中期以降に本格的に開発された新井田川中・下流域における遺跡構造については、住居址数、遺構数、遺物数等の構成とその変遷について、GIS等を用いた解像度の粗い分析に多くの成果を期待することは出来ない。それらを明らかにするためには、細別土器型式間における集落の消長を逐一跡付けてゆく地道な作業が必要となる。次年度は「ミクロな変化」としての各時期における具体的様相について、共同研究者が分担してまとめあげる。具体的には①新井田川下・上流域における遺跡構成の年次変化、②八戸における変化の画期として予想された「早期」、「後期」の集落変遷、及び複数土器型式間に見る集落の存続と解体、そのプロセスについての総合的解明を課題とする。

なお、研究成果については、随時ホームページ等に掲載して広く公開を目指す。既に平成26年度の活動成果の一部は公開済みであり、本年度もその姿勢を踏襲する予定である。本事業を推進する東北芸術工科大学東北文化研究センターのホームページの充実を図る。

② 東北縄文集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究

小林は「東北縄文集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究」の中で、前年度に引き続き、山形県内の縄文集落と周辺地域の比較事例の研究に従事した。特に縄文時代前期末葉の太木6式土器に着目し、福島県会津地方や宮城県南部の遺跡を検討し、地域的差異を明確にした。また青森県八戸市周辺の地域研究として同市に所在する風張(1)遺跡を検討し、国宝「合掌土偶」の編年の位置を確定すると共に、東北北部の縄文時代後期後半の編年研究を推進した。平成27年度も引き続き、最上川水系の縄文遺跡の研究に従事し、最終報告書を作成する。特に最上川水系の遺跡との比較に資するため、宮城県南部の縄文時代中期の遺跡（小梁川遺跡・大梁川遺跡）の集落構成や土器を分析する。また山形県内の縄文遺跡の分布の年代的変遷を跡付けて、地域的様相の明確化に努める予定である。

集落形成プロセスを歴史的に跡付ける上で山形県高島町日向洞窟遺跡は格好の検討対象フィールドである。これまで同遺跡から出土した遺物は日本随一の規模を誇り、広範囲にわたり縄文時代開始期における多量の遺物が残されたことで知られる。それらの豊富な遺物が、どのように形成されたものであるのか、今日的に優れた最新の考古学的調査手法に基づき、再点検することが列島人類史における定住化過程の一端を解明するうえで重要となる。そこで長井は平成25・26年度の発掘調査の成果を踏まえて、山形県東置賜郡高島町日向洞窟遺跡の第3回目の発掘調査を実施した（8月5日～9月16日）。本調査により、前年度調査で確認した遺物包含層の周辺部への広がりを確認できたこと、4,000点を越す縄文時代早期初頭から草創期後半の遺物の三次元的位置情報を獲得できたことの意義は大きい。また、各種の自然科学データの獲得にも成功した。A地区TP1の5層において検出された遺物包含層については、過去の日向洞窟遺跡の調査において未確認の文化層であることが判明したことにより、きわめて重要な成果が得られた。

(2) 古代社会研究

① 八戸市周辺の遺跡DBに基づく基盤研究

古代班では5世紀後半～11世紀までの約600年間（13期区分）における八戸市の遺跡データベースを完成させ（宇部・北野・長井作成）、近藤がGISを用いて竪穴棟数を単位とした時期別バブルチャートおよび密度図を地形図と重ねあわせて作成した。

竪穴建物数の消長からは集落は大きく4段階に区分できる。まず、第1段階は5世紀後半～6世紀中葉で、続縄文社会の中に倭系の竪穴建物が出現してくる。田向冷水遺跡では両者が共存しており、接触の様子を物語る。確認できる遺跡数は少ない。第2段階は6世紀後葉～8世紀後半で、7世紀後葉～8世紀前半に集落の拠点形成がみられ建物数のピークを迎える。第3段階は8世紀末～9世紀中葉で建物数が激減し、集落が少ない状態が続く。第4段階は9世紀後葉～10世紀後葉で遺跡への集住化が進み、建物数が再び急増する。この間10世紀中葉に一旦建物数が減少するように見え、最終的に10世紀後葉で集住傾向の強

い防御性集落が登場した。第5段階は11世紀代で遺跡・建物数ともほとんど見えなくなる。

以上のように、GISを用いて八戸市周辺の古代集落の分布や変遷を地形図上にビジュアルに表現することができるようになった。

② 東北古代集落変遷に関わる考古学的・環境史的研究

12月13日の公開研究会「八戸の集落1万年 古代地域社会の動態－なぜムラができ、消えたか－」を実施した。

宇部はまず、八戸市の古代集落の時期区分と北東北社会に起こった歴史事象との関係を整理した。青森県東部（下北・上北・三八）の古代集落全遺跡の消長を示し、2,200棟の竪穴建物跡が検出されているとした。地域区分では奥入瀬川～七戸川流域を境界とし、上北南部以南～八戸市、上北北部以北との地域差が顕著とする。これらは河口域の海上交通と内水面交通の接点に出現してくるとした。第1段階の倭系集落は移民を想定する。第2段階の7世紀の集落跡では関東系土師器やカマド構造に倭系社会の要素が顕在化し、移民の存在をうかがわせるが、北海道の黒曜石も入るなど南北の要素が認められる。第3段階以降の平安時代にはいると、それまで利用されてこなかった馬淵川西岸や北岸の丘陵部を含む多様な立地に集落が展開し、鉄器生産が活発化する。上北南部では9世紀後葉に出羽型甕やロクロピットを伴う建物が出現し、日本海側からの移民の動きが認められる。

齋藤は津軽地域の古代集落の動態を説明した後、その解釈について積極的に仮説を述べた。5～7世紀の集落消滅の要因として、古墳寒冷期における農耕定住社会から狩猟遊動社会への生業転換を挙げた。8世紀の建物、集落の出現は温暖化に伴う農耕定住社会への転換。9世紀の集落の急減、移転（北上）は政治や戦争、飢饉や自然災害の可能性を示唆した。9世紀末～10世紀前葉の集落の爆発的増加については大規模な移民は否定されるものの、局地的には流入した地域もあるとする。想定される人口支持力を超える建物数は単純に人口増と解釈するのではなく、焼き畑や出作り小屋等に伴う短期間の建て替えも想定すべきではないかとした。10世紀中葉の集落減少期を経て、10世紀後葉に出現してくる防御性集落や低地集落の盛行は生活様式全般にわたって社会が変容を遂げる時期とし、それが11世紀以降の考古学的には把握しづらい食器や建物構造、集落に引き継がれていく。

小谷地は古代の墓制について、まず、東日本全体の墳墓の分類を行い、青森県内の末期古墳や円形周溝、方形周溝、火葬墓等の墓制の数、分布、時期を検討した。末期古墳は7～8世紀に限られ、9世紀以降は円形周溝が主体となる。埋葬施設と周溝の深さの関係を検討し、円形周溝で埋葬施設が確認されにくくなるのは、火葬墓の普及と関連する可能性を示唆した。地下式横穴は丹後平古墳群のみで確認され、類似の墓制がある房総半島からの移民が想定される。平安時代には倭領域から波及したとみられる火葬に伴う蔵骨喜埋納等の事例が出現する。八戸地域で古代竪穴建物（集落）と末期古墳・円形周溝の時期別基数を比較すると7世紀後葉～8世紀前葉、9世紀後葉にともにピークが見られ、ほぼ対応する。墓制の推移を5段階にまとめた。

北野は八戸市の古代集落、北東北の古代集落の動態を解釈する参考として、東南アジア稲作農耕民の民族誌を紹介した。ラオスやイサーンでは開拓移住稲作民という行動様式や土地利用形態がある。また、大きな社会を作らない先住少数民族と国家形成民族との諸関係をみることもできる。コンテキストの異なる社会とはいえ、多民族社会の集落や移住パターンを理解しにくい私たちの思考の幅を広げる意味でいくつかの問題提起を行った。人口増加社会や未開原野が豊富な地域でのハーナーディーによる集落移動、分村による集落増加の事例、戦乱や政権による同化政策による集落の移動、災害復旧による集落の移動、異民族混在村の実態をいくつか紹介した。

これらの発表を通して八戸地域の古代集落の動態を、墓制や周辺地域の集落動態と比較したうえで、気候変動や火山災害などの環境史的側面、政治や戦乱、生業構造などの歴史社会的側面などから多角的に解

積する枠組みが出来上がってきたと考えられる。

4 本研究に関する研究成果

安斎正人

著書

- ① 2015年5月19日『縄文人の生活世界』啓文舎

論文

- ② 2015年8月1日「縄文文化の外来起源論」『季刊考古学』第132号、87-90頁

講演録

- ③ 2015年5月30日「縄文の美-実用性を遥かに超える芸術的表現-」『東北文化友の会会報 まんだら』57号、2-11頁

北野博司

研究発表

- ① 2015年12月13日「集落の移動と定着」『公開研究会八戸の集落1万年 古代地域社会の動態-なぜムラができ、消えたか-』東北芸術工科大学東北文化研究センター主催（開催地：八戸市埋蔵文化財センター-是川縄文館）

小林圭一

論文

- ① 2015年5月20日「縄文晩期の土偶たち」『「縄文の女神」と「遮光器土偶」-縄文の美と宝-』（展示パンフレット）10-13頁、山形県立博物館
- ② 2015年11月28日「押出遺跡における縄文前期遺跡との接触・交流」『縄文時代前期遺跡の集落構造と生業・交流』59-89頁、縄文時代前期遺跡シンポジウム実行委員会
- ③ 2016年3月1日「会津地方の大木6式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15（印刷中）、東北芸術工科大学東北文化研究センター
- ④ 2016年3月31日「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要』第8号、21-50頁（印刷中）、山形県埋蔵文化財センター

学会発表・講演

- ⑤ 2015年8月29日「最上川中流域の縄文集落」『「山形学」地域連携西村山地域史研究会市民講座 山形の歴史を学ぶ』西村山地域史研究会主催（開催地：山形県寒河江市）
- ⑥ 2015年11月29日「押出遺跡における縄文前期遺跡との接触・交流」『縄文時代前期遺跡の集落構造と生業・交流』うきたむ学講座実行委員会・山形考古学会主催（開催地：山形県南陽市）
- ⑦ 2016年1月23日「縄文後半期の土偶と集落」『平成27年度山形県立博物館考古学講座-やまがたの土偶-』山形県立博物館主催（開催地：山形県山形市）

長井謙治

論文・報告書・研究発表要旨

- ① 2015年4月10日（編著）『日向洞窟遺跡の発掘記録-第1次発掘調査報告書-』東北芸術工科大学東北文化研究センター
- ② 2015年5月1日Archaeological Research at the Hinata Caves for Enhancing Public Archaeology. A Strategy of Cultural Enrichment Museum: Heritage Education, The 7th International Workshop

of Heritage Education and Site Preservation for Commemorating the 23rd Yeoncheon Jeongok Paleolithic Festival, pp.8-14, Institute of East Asian Archaeology

- ③ 2015年5月30日「〈特集〉遺跡を掘り、自らを掘り深める－日向洞窟遺跡発掘調査－」『東北文化友の会会報 まんだら』57号、14・20頁
- ④ 2015年8月1日「コラム 日向洞窟遺跡－山形県高島町」『季刊考古学』132号、91－92頁
- ⑤ 2015年12月19日「日向洞窟遺跡発掘調査の概要－2015年度発掘調査－」『第29回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』東北日本の旧石器文化を語る会、51－58頁

招待講演

- ⑥ 2015年8月30日「縄文植物まつり：縄文アート座談会」『第15回縄文国際コンテンポラリー展2015in ふなはし：「環」サハリン、アムール、カムチャッカ～北米大陸へとつながる古代と現代』縄文コンテンポラリー展実行委員会主催（開催地：船橋市飛ノ台史跡公園博物館）
- ⑦ 2015年9月12日「蘇る日向洞窟：芸工大の発掘調査速報」『国指定史跡日向洞窟発掘60周年記念講演会 眠りから覚めた日向洞窟－その魅力に迫る』高島町教育委員会、高島町文化財保護会、東北芸術工科大学東北文化研究センター主催（開催地：屋代地区公民館多目的ホール）